

“しごと”を創る仕事

Bチーム

ちば共創都市圏がもつ農業ポテンシャル

- 年々増え続ける耕作放棄地 → 空白地がいっぱいあるのにもかかわらず、活用できていない
- 冬暖かく夏涼しい海洋性の温暖な気候
- 国内最大消費地に近い

私たちが考えたこと

千葉の持つ農業のポテンシャルを最大限活かす仕事

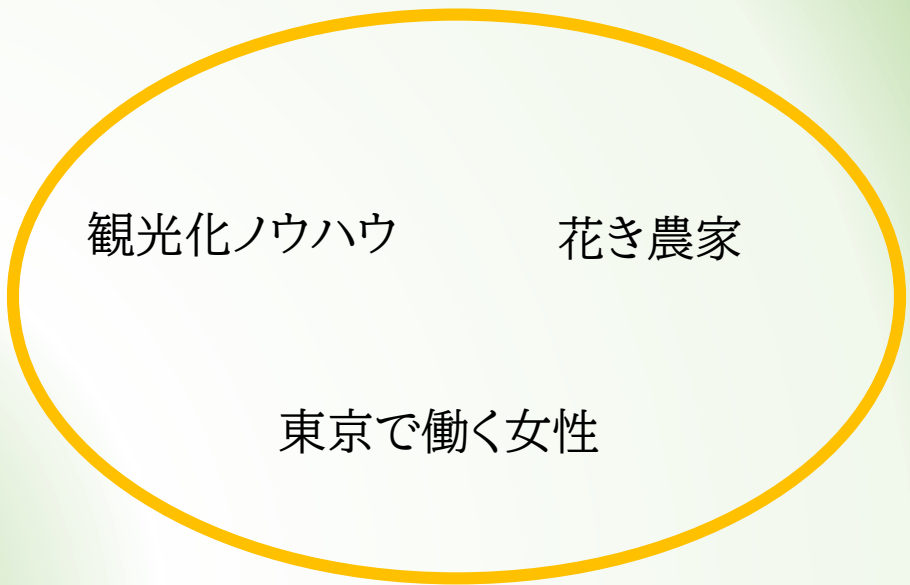
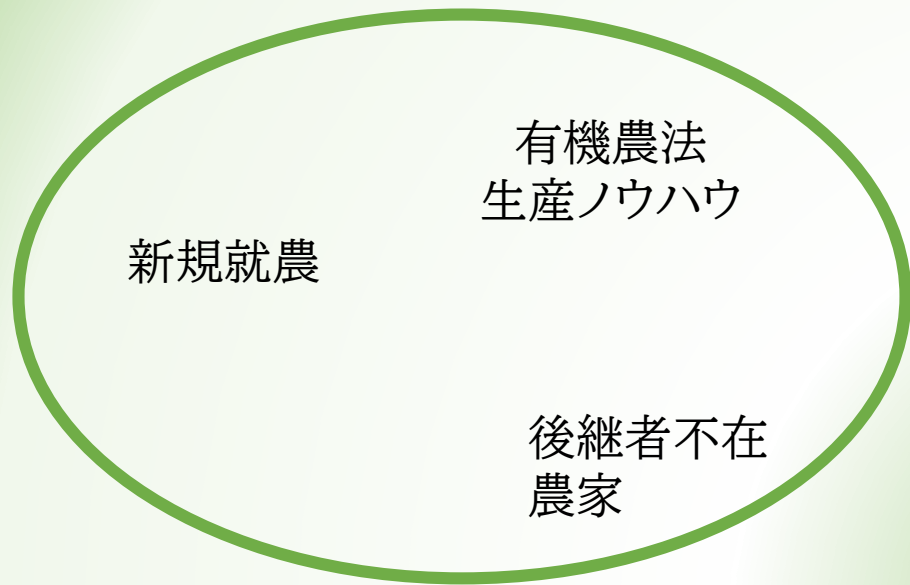
農業のthink tank を作り、農業の価値をあげる仕事

人と人をつなげる仕事

“しごと”を創る仕事

Think tankとは

- 千葉市を拠点とする(共創都市圏の中心となり、人が集まりやすい)
- 農業の技術や工夫などで、直接レクチャーを受けないとわからないような情報の見える化をする。
- またその見える化された情報を、欲しい人(主に新しく農業を始めた人)に提供する。
- 情報を価格をつけてthink tank側に、新しく農業を始めた人の売り上げに応じた何割かを提供者側に、稼ぎをいれる。



コンサルタント
マッチング
法人運営



農業法人

地の利を活かした
パラレルワーク

“しごと”を創る仕事とは

千葉市でコンサル 有機農業と花卉産業を核とした千葉県農業の ブランディング

業務内容

1. 新しい農業ビジネスモデルの導入と運営
2. 販路の確立
3. 新しい働き方の創出

有機野菜の栽培

候補地 ちば共創都市圏全域

対象者 新しく有機農業を始めたい
新規就農者及び域内農家

方法 海外で有機農業をしている方を日本に
呼び、ノウハウを提供。

千葉の土壌を知り尽くした、地元で農業して
いる方のノウハウをそれに重ね、有機を栽培。



千葉共創都市圏で生まれる有機野菜
千葉産の野菜をブランディング

有機野菜が欲しい消費者に販売

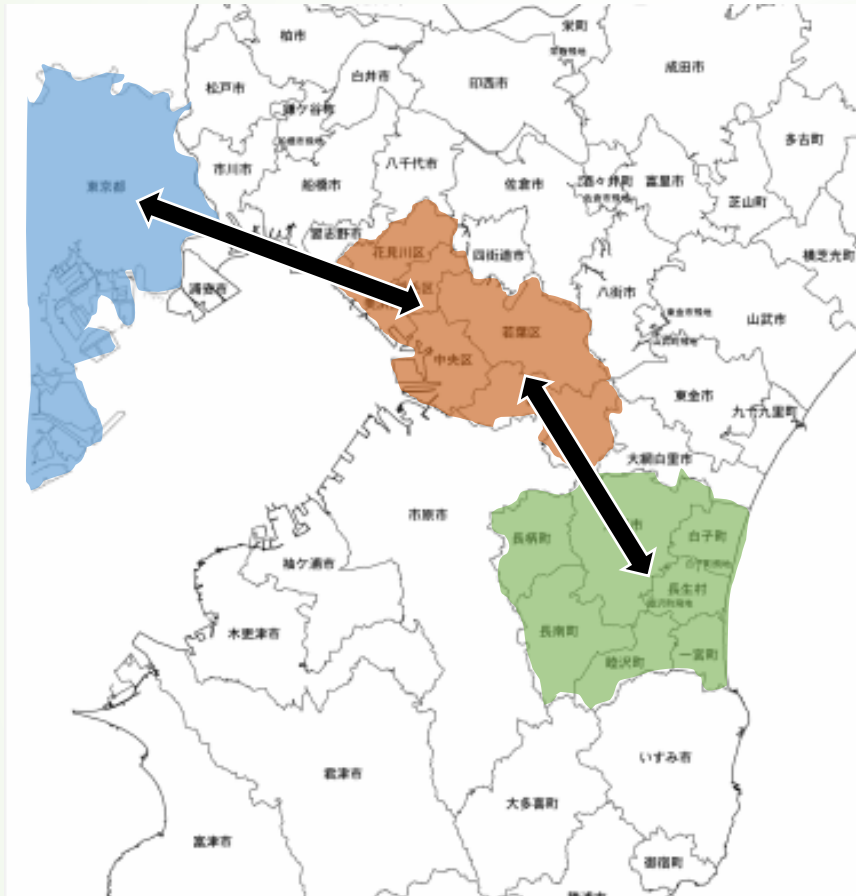
有機農業の課題

- 「有機野菜」として販売するには「有機JAS認証」を受けている必要がある。
- 有機JAS認証の審査費用や、有機JASマークのシール代・パッケージ代はすべて農家負担となるため費用対効果が釣り合わない。
- 一般農産物と同レベルの形のきれいさが有機農産物に求められる。
(虫食いなどが疎まれる)
- ヨーロッパでは、「環境によい」から有機農業が選ばれるが、日本では「体によい」から選ばれている。
- 「環境によい」だと次世代への投資という理由で選ばれるが「体によい」だと格段悪いわけではないと思われてしまう。

有機農業の対策

- 海外では有機農産物への需要(消費)が高い。そのため東京オリンピックのときに日本で試し売りという形で売り、千葉＝有機農業というブランディングを図る。
- 千葉市で有機農業を応援するために有機JAS認証の審査費用の支援をする。そうすることで新たに有機農業をしたい人向けに千葉共創都市圏を有機農業の拠点にする。

地の利を活かしたパラレルワーク



- 居住地
- 勤務地
- 新しいしごと場

・都市圏(千葉市)と地域が隣接する
地の利を生かした複業提案

例	働く	住む	働く
現在	東京都	千葉市内	
↓	働く場所を県外から千葉共創都市圏内へ		
Case1	千葉市内	千葉市内	共創都市圏
Case2	共創都市圏	共創都市圏	千葉市内

・近接エリアで働ける場所の創出
→農業の新生産拠点 例(花き栽培)

地の利を活かしたパラレルワーク

花き栽培と観光イングリッシュガーデン経営

花き栽培と通年型イングリッシュガーデンの併設による安定収入の確保

働く人のWin

複業による収入増

例:収入:現状 30万円/月(1か所)

複業 →15万円+20万円=35万円

その他メリット 通勤時間短縮 自由時間の増加
時間の有効活用、

千葉市のWin

千葉市居住者の流出防止

千葉市内就労の増加

千葉共創都市圏のWin

花き栽培による農作物算出量の増加

働く場の創出

若者の農業参画者増加

女性の就労促進(子育て、共働き)

6次産業化の促進

新しい働き方で幸せになれる“ちば”

Win-Win

ちば共創都市圏にある活用されていない、使われていない土地を都市部の人たちがうまく活用することで、圏全体の農業を活性化。



農業が繋がりを創り、様々な出会いを生む。

都市部と地域で人が行き交うことで、圏全体の経済の活性化にもつながる。